

特集

2

～追突・逆突事故を防止～



今回は、追突事故を防止するため事故の原因、トラックの視界特性、必要な車間距離の保持とその方法等について述べてみました。

今回は、組合事業所運転者による事故のうち、追突事故の次に多い逆突事故について考えてみましょう。

逆突事故の防止

1. 対物・車両事故の発生状況

平成11年度の当組合の対物・車両事故は1,765件で、そのうち逆突事故は438件(25%)と一番多く、追突事故の412件(23%)と合わせ全体の約半数(48%)を占めています。

また、構内における逆突事故の53%は駐車車両への衝突で第1位を占めています。この順位は例年変化がありません。

2. 逆突事故の原因

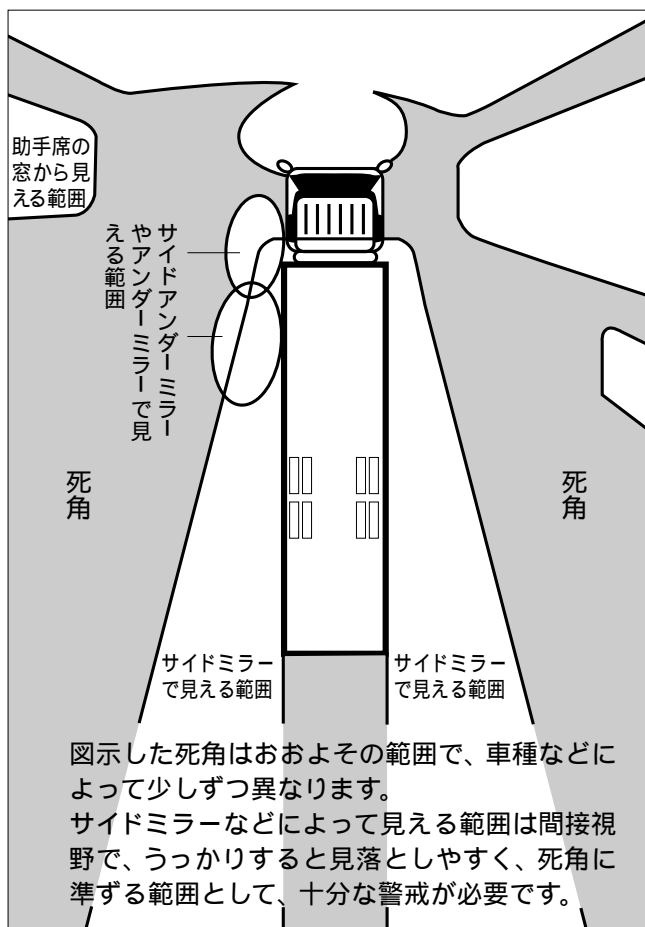
(1) 後方は殆ど見えない

トラックは大きくなればなるほど乗用車とは比べものにならないほど死角も大きくなります。4トン～5トンの平ボディ、空車の例で見ると、その死角は、

- 前方 5～7メートル
- 左方 7～8メートル
- 右方 1～2メートル
- 後方 18～20メートル

もあり、後方は殆ど見えない状況です。

次図は、ある大型トラックの死角の例です。



運転者は、

- ① 大きな死角を忘れている
- ② 死角の危険性を気に留めていない

ことが多く、これにより駐車車両、家屋、建物、門柱等への衝突が多くみられます。

(2) 車体の大きさの認識不足

運転車両の長さ、幅、高さの認識不足、特に上方の警戒不足により、看板・シャッター・庇等への衝突も多く発生しています。

(3)バック事故は構内で多く発生している

「ここは公道ではないから」という油断から、後方確認を怠るなどの気の緩みが原因で起こすケースが多いようです。

また、バック事故の多くは物損事故であるため、事故を起こしてしまったことへの反省が希薄になりやすく、次の事故防止につながりません。

3. 事故の防止方法

(1)車体検査証の確認

安全運転トレーニングセンターの受講者アンケートによると、9割近くのドライバーが自車両の車検証を確認していません。

まず、車検証で運転車両の大きさ等を確認するとともに、最大積載時の高さ等を視認し、車体感覚を認識することが大切です。

(2)死角の確認

構内でセーフティ・コーン等を利用し、左右、後方の死角を確認し、隠れた危険を認識することが大切です。

(3)バック走行の基本厳守

①ミラーと目視で後方の安全を確認したか、右後方だけでなく左後方まで広く安全を確かめたか、場合により下車して後方確認をしたか。

②最徐行で後退したか

歩行速度よりも遅く直ちに止まれる最徐行で後退したか。

③バックアイカメラや誘導員の指示を過信していないか。

あくまで運転者本人の視認による安全確認が基本となります。

④完全に停止をするまで後方を確認しながらバックしたか、特にバックの途中で安全確認を止め、前を向いてしまうことが多いので、右窓から頭を出し目視で安全を確かめ、時折左ミラーで左後方の安全を確かめることが大切であり、死角の存在箇所を意識しながら後退するのが基本となります。

ここで、右手で運転席側のドアを開き後

方の状況を確認する行動を多く目にしますが、左手でハンドルを操作しながら後退するのは、制動等の操作に支障をきたすおそれがあるので、ドアを開けての運転は避けるべきです。

⑤構内のバック走行

初めて入る構内は勝手が判らないため、関係者から構内走行のルールや、危険箇所の教示を受けることが必要です。

バックや方向転換する場所については、その前に必ず駐車車両・シャッター・塀・その他の工作物等への安全を確認することが必要です。

4. 結び

全国の交通事故による死者数は4年連続1万人を下回ったものの、発生件数、負傷者数ともワーストを更新し、本年は更に悪化の一途を辿っています。死者数においても本年は増勢に転じています。

組合員事業所の運転者による交通事故も、前年度までは若干減少傾向を示していましたが、本年度は対人事故、対物事故とも増加に転じています。

最初にも述べましたが、トラックドライバーが起こす一番多い事故は追突・逆突事故です。これを防止することにより、事故は半減します。この特集で述べた基本をしっかりと守ることができれば、無事故は達成できるものと確信しております。

当組合では、組合員事業所の8割強に及ぶ727社のご参加を得て、10月末日までに亘って現在「第4回セーフティドライブ・チャレンジ100運動」を展開中です。この運動をはじめ各季に行う安全運動の機会を捉え、安全運転の周知徹底をお願い申し上げます。

また、ドライバーの運転適性を診断する「つばさ」号のご利用や、追突・逆突事故の防止を中心に、運転者によるグループ討議を含めた参加型の安全運転研修、「安全運転トレーニングセンター」の受講をお勧めします。